

平成 28 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第41回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは197編、2年生からは188編と、合計385編の応募がありました。情報メディアセンター運営委員会の教員6名と国語科教員4名による審査・投票の結果、その中から8名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽をたたえたいと思います。

最優秀賞

機械工学科2年 末永 共助 「夢」を捉える

優秀賞

機械工学科2年	樽井 颯	人を強くする出逢い―「君の名は。」を読んで―
電気工学科2年	近藤 亘	人と人の関わりのおもしろさ―「レインツリーの国」
電子制御工学科2年	風岡 颯	罪を背負う人―「手紙」を読んで
物質化学工学科2年	青田 奈恵	自然と数学の結びつきの奥深さ
機械工学科1年	木村 元哉	「レインツリーの国」と障害者への向き合い方
物質化学工学科1年	安藤 うた	高校野球に携わる人々
物質化学工学科1年	村田 優果	変わり者のカモメから学んだこと―「かもめのジョナサン」を読んで―

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得た作品16編について佳作としました。以下に、氏名を紹介し、その努力を称えます。

佳作

2M 足立 悠喜	2E 上田 祐資	2E 面尾 時彦	2S 西尾 颯真
2I 藤本 祥	2I 細見 吏	2C 橋 優太	2C 堀江 真代
1M 榊 和馬	1E 上垣 柊季	1E 曾我部杏樹	1E 鷺谷 拓哉
1S 小澤 亮太	1S 小野 雄河	1S 山本 拓実	1I 松本 裕暉
1I 毛利 想一			

さて、応募作品全体と入選作品について、以下に講評を述べます。

まず、全体の印象です。今回は昨年公開された映画「君の名は。」と「レインツリーの国」の原作を取り上げた感想文が多く寄せられました。両作品はいずれも、見ず知らずの男女があるきっかけで互いの存在を知り、徐々に距離を縮め、絆を深めていくという作品です。その中で登場人物の心の動きが丁寧に描写されており、読者にとって登場人物に感情移入しやすく、自身の経験と重ね合わせながら読み進めることができる作品だと思います。両作品への感想文は、今回の優秀賞にも選ばれています。

最優秀賞に選ばれた2Mの末永さんは、主人公・吾一の学問に対する熱意を軸に作品のあらすじを簡潔にまとめています。その上で、夢や願いを想い続けることの大切さ、そのように強い想いを抱くことで多くの困難に打ち勝つことができる強さについて感想をまとめています。また「精神一到何事かならざらん」という本文中の印象的な言葉を感想文の冒頭に記し、読者の興味を喚起しています。感想文の最後では「『精神一

到』の精神があれば、芯の通った大きな人間になれると思う」とまとめており、全体として一貫性のある優れた感想文と言えます。

2Mの樽井さんは、主人公の瀧と三葉の入れ替わりや、恋や記憶という観点から、人を強くする出逢いについて自身の考えをまとめています。「出逢い」というと人との出逢いを連想しがちですが、樽井さんは身近な物や環境も出逢いの一つと考えています。「君の名は。」は時空を超えた二人が出会うファンタジーですが、却って身近な物に目を向けるきっかけとなったのでしょう。

2Eの近藤さんは、障害者や健常者といった枠組みを超えて、他者を理解し受け入れることの難しさについて考えています。内に抱えた悩みや辛さも含めて、ありのままの他人を受け入れることは難しいことでしょう。近藤さんはそれができるようになるために、知識と経験を積み重ねたいと言います。多種多様な書物を読むことも、知識や経験を積み重ねる手立てとして活用してもらいたいと思います。

2Sの風岡さんは、兄の犯した罪によってその弟や弟家族が差別を受けるという内容から、犯罪は、犯した人だけでなくその周囲の関係者にも不幸をもたらすという罪の重さについて感想を述べています。作中には、偏見を持たずに弟を支える人物も登場します。その人々の強さからも学ぶことが多かったことでしょう。このように、実際には遭遇しにくい状況を仮想的に体験できるのも、読書の魅力の一つと言えます。

2Cの青田さんは、身近な現象の中にある数学的規則性について、その発見の歴史的背景を知ることで、知識の本質に触れることができると言います。新たな発見や発想の背景には人の営みがあったわけです。将来、物作りや研究開発に携わるであろう高専生の皆さんには、人の営みを知り、身近な所に目を向け、じっくりと観察する力も養ってほしいと思います。

1Mの木村さんは、ヒロインである「ひとみ」の聴覚障害が、ひとみの「個性」として描かれていると言います。一方で、障害を「個性」として受け止めることの難しさを、木村さん自身の経験と引き付けてまとめています。このように実体験と重ね合わせることで、その読書経験はより豊かなものとなり、読者自身の体験として蓄積されていくことと思います。

1Cの安藤さんは、高校野球に携わる人々のエピソードを集めた「最後のプレイボール」を通して、選手と選手を支える周囲の人々との絆についてまとめています。野球に限らず、何かに打ち込むためには自身の強い信念とともに周囲の力が必要だと思えます。人は他者と支えあうことで生きていけることが改めて認識される作品だったのでしょう。

1Cの村田さんは、周囲に理解されない中でも、自身の生き方を貫くカモメのジョナサンの強さを通して、自己を貫く勇気や尊厳について記しています。感想文の最後では「真の自由を追い求め、努力を続け、自分に素直に生きていきたい」と言います。様々な情報が飛び交う昨今、自分に素直に生きることは難しいことかもしれません。しかし、高専生の皆さんには、周囲に流されず、自分らしさを大切にしていってほしいと思います。

今回入賞した感想文には、「自己を貫く強さ」や「人と人との絆」について書かれたものが多かったように思います。スマホなどの電子機器が発達する中で、情報が氾濫し、人との関わり方も多様化しています。このような環境の中でも、「自分らしさ」や「生身の人との関わり」を大切にできる人に成長してほしいと願っています。そして、来年度は今より一回り成長した皆さんから、今年度を上回る力作が数多く応募されることを期待しています。

(国語科 松井)

